



## LED on Tour

今月はイングランドとウェールズの境界線にある、ラドロウという町に来ています。ここを拠点に活動している小劇団、ペンタバス劇団のツアー公演の照明デザインをするためです。この仕事のお話をいただいたとき、はじめに聞かれたのは、「LEDの機材に慣れていらっしゃいますか？我々の劇団は、使える電力がとて限られている、地方の公民館や教会ばかりを回るので、今年から我々のすべてのツアー機材をLEDに買い換えました。照明デザイナー（あなた）にとっては、LEDでどこまで深みのある明かりを作れるかが鍵になってきます。」ということでした。

最近、LEDの機材を使うことがとて多くなってきたものの、演劇では、やはり前明かりなどの、役者の表情を見せる明かりは、タングステンの灯体ばかりでした。LEDのみで、演劇の公演をデザインするという機会はなかなかないですし、挑戦する価値のある面白いプロジェクトのようだったので、ロンドンからはかなり遠いですが、引き受けさせていただくことにしました。

この劇団のために、LED機材を選んだのは、ウエストエンドの照明を長年手がけている、ジョアナ・タウン氏だったそうです。あの有名な照明家が提案するLED機材なので、きっと機能の優れたLEDに違いない、という期待もありました。ジョアナ氏が劇団のために選んだ、ツアー用LED機材は以下のとおりです。Rosco Miro Cube WNC、Rosco Miro Cube 4C、Chroma Q Color One 100、Chauvet COLORdash Accent Quad、Source 4 Mini

LED。私が使ったのは、これらの灯体、全25灯のみ。小劇団、そしてツアー先での仕込み時間が、セットの組み立ても含め、2時間半しかないということだったので、機材も最低限の数にしました。これらの灯体の光量や、フェードの仕方、色味を実験するために、プロダクションウィークの前に、数日間ラドロウを訪れました。

Chroma Q Color One 100 (RGBA カラービーム) は、わりと簡単にタングステンの色が出せました。見た目はスマートで、トップハットもつけられます。しかしサイズのわりには重いです。ETC NomadでLEEフィルターから色を選ぶと、あまりLEEに近くない色でしたが、マニュアルで色を打ち込むと、彩度の強い色から淡い色まで綺麗に出るし、フェードもとてスムーズです。影も3色ににじみ出ないし、綺麗なビームです。この灯体が、一番色味が綺麗だったので、私は今回この灯体を前明かりで使うことにしました。

Rosco Miro Cube WNC (4セル入った白ウォッシュ) は、名前のとおり、キューブ型で床置きでも簡単にできます。Cool whiteとWarm whiteの値が打ち込め、Warm whiteは綺麗なタングステンらしい生明かりが出せます。タングステンを低いゲージにしたときの暖色になっていく変化はないものの、500wのフレネルを80%～fullでつけたときくらいの明るさと色度が出せます。20、40、60度のビーム拡散専用フィルターも着けられます。

Rosco Miro Cube 4C (4セル入っ

たRGBWカラーウォッシュ)も、機材の外見はほぼCube WNCと同じですが、こちらは色が出せます。

Cold/warm whiteがパラメーターにないため、フレネルの生明かりのような色を出したいときは、自分で色をミックスしてフレネルの生の色に近づけていかなければなりません。フェードはCube WNCと同様、とて安定しています。

Chauvet COLORdashは、フェードの上がりだしが、あまりスムーズではなかったです。フィクスチャー自体にカーブをアプライすると、スムーズなフェードになるものの、キューのタイムが約2秒以下だと、2秒で消えきれないということも発見しました。Source 4 Mini LEDは、使い勝手もフェードもとて良かったです。ほとんどのスペシャル（特別キークライト）に使いました。

暖色から寒色へ変化するキューでは、Color pathを作り、緑のエリアをなるべくフェードしないようにしました。ほかにも、カットアウトキューでは、0秒で消すのではなく、あえて0.2秒で消してタングステンらしく見せるなどの工夫をしました。すべてをLEDにすることで、DMXも電源もデージーチェーンでき、デイマーでツアーしていた頃に比べ、配線が大分簡素化されました。

今後のLEDの進化で、よりお仕事がスムーズに、バラエティー豊かになっていくことを願っています。



バックライトの仕込み。前明かりも同じ灯体



テクリハ / タングステンの色味を目指して